

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010 年 10 月 22 日

派遣者氏名（専門分野）	後藤敦史（日本史学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	開国期における江戸幕府の外交と国際世界
-------	---------------------

派遣期間

2010 年 9 月 2 日 ～ 9 月 13 日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	アメリカ合衆国	ワシントン D.C.	アメリカ議会図書館	なし

派遣先で実施した研究内容

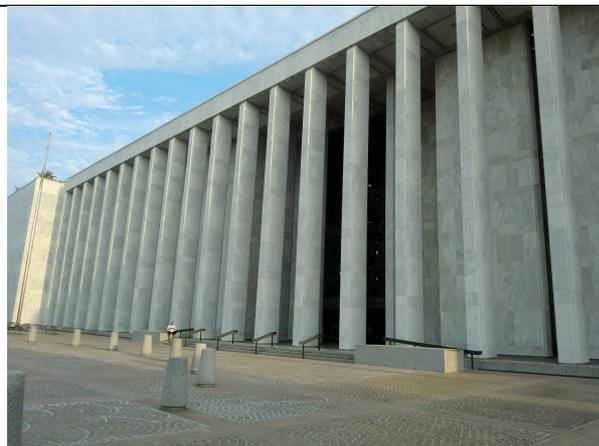
報告者はこれまで、1853 年のペリー来航前後における徳川幕府の外交について研究を行ってきた。その研究を進める中で、1855 年に日本へ来航したアメリカの北太平洋測量艦隊が、幕府内の有司たちの対外観に大きな影響を与えたことが分かってきた。しかし、この測量艦隊がどのような性格のもので、どういった目的を有していたのか、といった基本的な点は、日本史の研究ではほとんど明らかにされていない。また、その測量艦隊を率いていたのは、アメリカ海軍のジョン・ロジャーズ（1812～1882）という人物であるが、彼の存在も、日本史研究者の間でほとんど認知されていないというのが現状である。

そこで報告者は、アメリカ議会図書館を訪れる「横断的研究視察」に応募し、ジョン・ロジャーズおよび北太平洋測量艦隊に関する史料の調査を実施することとした。引率の小林茂教授が事前にアメリカ議会図書館のライブラリアンと連絡をとってくださり、同図書館には、ロジャーズ家の史料群、Rodgers Family Paper が所蔵されていることが分かった。同史料は、アメリカ議会図書館のマニュスクリプト・リーディング・ルーム (Manuscript Reading Room。以下、MRR と略記) にあり、報告者の調査期間の多くは、同室での史料の撮影にあてられた（なお、MRR の利用方法等に関しては、「OVC プログラム派遣先期間等利用マニュアル」で詳細に説明する）。

MRR を初めて訪れたのは、9 月 4 日である。そこで、ライブラリアンから、ロジャーズ家の史料については、Rodgers Family Paper とは別に、the Rodgers Family, Naval Historical Foundation Collection という史料群も存在することを教わった。後者はオンラインカタログに載っておらず、実際に MRR を訪れて、同室に架蔵されている紙媒体の目録を見なければどのような史料がおさめられているのかが分からない。

実際に史料を見ると、Rodgers Family Paper は、報告者が調査したいと考えていたジョン・ロジャーズの父

親（父親もアメリカ海軍の軍人）に関係する史料から構成されていることが判明した。中にはジョン・ロジャーズとの書簡も含まれていたが、報告者が特に調査を行いたいと考えていた、北太平洋測量艦隊に関わる史料は見つからなかった。一方、the Rodgers Family, Naval Historical Foundation Collection には、ジョン・ロジャーズが北太平洋測量艦隊を率いている時の公文書や、あるいは私的な書簡などが多数おさめられており、同艦隊について調査する上で、非常に貴重な史料であることが判明した。また、私的な書簡を用いれば、ジョン・ロジャーズの交友関係なども分析できるであろう。



以上のように、実際にアメリカ議会図書館を訪れることで、オンラインカタログだけでは判明し得なかった史料を発見することができた。今後は、アメリカ議会図書館で撮影した史料を用いて、日本開国とアメリカ海軍との関係などについて研究を行いたい。

※写真は MRR のあるアメリカ議会図書館マディソン館

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

北太平洋測量艦隊におけるジョン・ロジャーズの公的な報告類が見つかったことで、日本滞在中を含む同艦隊の具体的な動向が明らかにされることが期待できる。史料は目下読解中であるが、北太平洋測量艦隊を最初指揮して途中で指揮権をジョン・ロジャーズに譲ったリンゴールドという人物との書簡類もあり、1852年から56年の北太平洋測量艦隊全体の動向を把握することも可能と考えられる。

今後はジョン・ロジャーズの関係史料を見ながら北太平洋測量艦隊の詳細について明らかにし、日本開国期において北太平洋測量艦隊がいかなる役割を担ったのか、という点について、日本史、アメリカ史、あるいは世界史的観点など、様々な視角から分析していきたい。

派遣後の研究発表の予定

北太平洋測量艦隊に関する論文を執筆する。また、2012年開催のアジア世界史学会（韓国、梨花女子大学）で、今回調査した史料も用いた研究報告を行いたい。